

聖マリア病院新生児科における極小未熟児の予後 (分担研究：ハイリスク児の調査に関する研究)

研究協力者 橋本 武夫
共同研究者 出良 弘

要約：1990年に聖マリア病院新生児科に入院した極小未熟児について、その退院後の経過を調査した。
見出し語：極小未熟児、神経学的後遺症、検診中断例

研究の目的と方法：ハイリスク児の総合的ケアを考えるうえで退院後の児をいかに把握していくかということも重要な要素である。1990年に聖マリア病院新生児科に入院した極小未熟児のうち、生存退院した症例についてその予後を調査し、ハイリスク児の調査に関する研究を行った。

結果：表1に1990年入院の極小未熟児の出生体重別・在胎週数別の極小未熟児の予後を示す。入院総数125例のうち生存退院数は94例(75%)であったが、出生体重750g未満、または在胎週数26週未満の児の場合、その生命予後は他の群に比し極めて不良であった。

1年以上追跡可能であった症例のうち明らかな神経学的異常を認めた症例は、17例(20%)であり、1000g未満の超未熟児群について多い傾向が認められた。最も多かった神経学的異常はMR単独の症例であり、てんかんは単独では認めなかった。CPについても単独で認めた症例は1例(14%)のみであった。

人工換気24時間未満の症例29例のうち明らかな神経学的異常を認めた症例は6例(20%)であったが、このうち重症仮死1例、重篤な低血糖1例のみで頭蓋内出血を合併した症例は認めなかった。

また人工換気24時間以上の症例55例のうち明らかな神経学的異常を認めた症例は11例(20%)であったが、このうち重症仮死4例、頭蓋内出血4例、重篤な低血糖1例、染色体異常1例(21トリソミー)であった。

1年以上の追跡が不可能であった検診中断例は9例であった。このうち2例は里帰り分娩の症例で退院後は居住地の病院へ転院している。他の7例中3例は通院に2時間かかる遠隔地であり、2例は社会的問題を抱えた母親であった。

また1985年に比し1990年では神経学的後遺症を認める児の総数の増加を認めた(図2、表2)。

考案：極小未熟児の退院後の日常生活に関わってくるものとして、神経学的後遺症、呼吸器後遺症、眼科の後遺症などが重要である。1990年に限ってみるならば当院新生児センター退院児の場合は神経学的後遺症が最も重要なものであった。

さらに1985年に比し1990年には後遺症の発生頻度の減少を認めるのは超未熟児のみであり総数では漸増傾向にあった事は極めて重大である。また退院時には予想されなかったのに重篤な後遺症を認めた症例も多く、これらの調査結果よりきめ細かな検診体制の重要性を再認識した。また検診中断例のなかにも重篤な後遺症の発生が予想される症例が多く、特に遠隔地に居住する児への配慮が望まれる。

表1

極小未熟児予後調査表 1990年度
出生体重別

出生体重	入院総数	生存退院			1才までの追跡例総数	1年以上追跡例総数								
		生存退院数	半年以上長期入院	死亡数		正常例	死亡数	CP	MR	両眼失明	聴力障害	てんかん	在宅療養	
<750g	20	5	2	0	4	3	0	0	1	0	0	0	0	0
<1000g	28	21	7	0	18	13	0	0	6	0	0	0	0	0
<1200g	28	21	0	0	18	14	0	3	3	0	0	1	0	0
<1500g	51	47	2	0	43	37	0	4	6	0	0	2	0	0
合計	125	94	11	0	84	67	0	7	16	0	0	3	0	0

在胎週数別

在胎週数	入院総数	生存退院			1才までの追跡例総数	1年以上追跡例総数								
		生存退院数	半年以上長期入院	死亡数		正常例	死亡数	CP	MR	両眼失明	聴力障害	てんかん	在宅療養	
<26週	22	10	3	0	9	8	0	1	3	0	0	1	0	0
<28週	30	21	4	0	18	14	0	0	4	0	0	0	0	0
<30週	22	19	1	0	18	15	0	2	2	0	0	1	0	0
<32週	21	17	0	0	14	14	0	0	0	0	0	0	0	0
<34週	14	13	1	0	13	10	0	2	3	0	0	0	0	0
<36週	16	14	2	0	12	8	0	2	4	0	0	1	0	0
合計	125	94	11	0	84	67	0	7	16	0	0	3	0	0

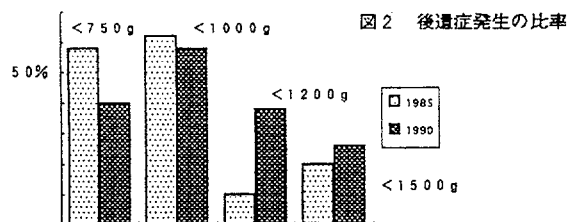
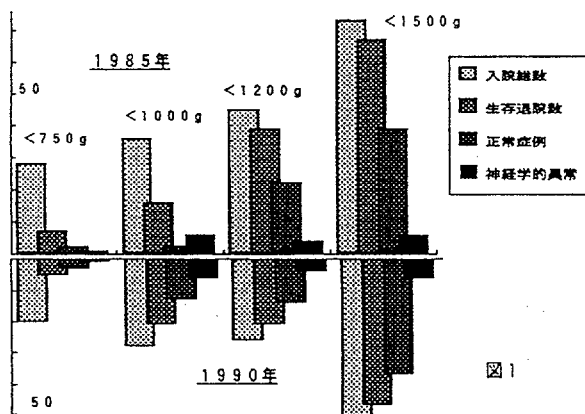
極小未熟児予後調査表 1985年度
出生体重別

出生体重	入院総数	生存退院			1才までの追跡例総数	1年以上追跡例総数								
		生存退院数	半年以上長期入院	死亡数		正常例	死亡数	CP	MR	両眼失明	聴力障害	てんかん	在宅療養	
<750g	29	7	6	0	5	2	0	1	2	0	0	1	0	0
<1000g	38	18	6	0	6	2	0	1	5	1	0	1	0	0
<1200g	45	39	3	0	24	22	0	1	1	0	0	0	0	0
<1500g	73	67	0	0	48	39	0	2	4	1	0	1	0	0
合計	182	129	15	0	81	65	0	5	12	2	0	3	0	0

表2

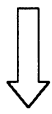
在胎週数別

在胎週数	入院総数	生存退院			1才までの追跡例総数	1年以上追跡例総数								
		生存退院数	半年以上長期入院	死亡数		正常例	死亡数	CP	MR	両眼失明	聴力障害	てんかん	在宅療養	
<26週	38	13	9	0	7	3	0	1	4	0	0	2	0	0
<28週	32	18	4	0	9	5	0	1	3	2	0	0	0	0
<30週	55	45	2	0	31	28	0	3	2	0	1	1	0	0
<32週	31	28	0	0	15	13	0	0	2	0	0	0	0	0
<34週	13	13	0	0	9	8	0	0	1	0	0	0	0	0
<36週	13	12	0	0	10	10	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	182	129	15	0	81	65	0	5	12	2	1	3	0	0





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:1990年に聖マリア病院新生児科に入院した極小未熟児について、その退院後の経過を調査した。